

宝捜しの夕景

ロム虫

陽太はゆつくりとした歩調で坂道を登る。夜にもかかわらず漂う熱気のせいで汗が吹き出る。それでも、一番上まで行こうとしていた。そこからの眺めがとても綺麗なこととは、ずっと前から知っていた。坂道の終わりにある、緩やかで小高い丘の展望台。自宅からはバス停二分、学校からは七つ分。そして——隣を一緒に歩く少女、雲雀の自宅からは九つ分。

「ねえ」

不意に雲雀が口を開く。陽太は知らないうちに重くなっていた口を開いて応える。

「なに？」

「今日で、どれぐらいになるんだっけ」

その質問に答えるため、陽太は頭の中で計算を始める。

「二年と、一ヶ月」

「だよね。じゃあ、陽太の誕生日？」

「それはもう過ぎた」

「うん、プレゼントあげたもんね……じゃあ、今日は何の日？」

「行けばわかるよ」

「もう、さつきからそればっか」

雲雀は少し不機嫌そうな声を上げる。どこことなく、疲

れによるものもあるようにも思える。

そのまま二人はそろって黙り込む。長い坂なので、二人とも疲れが表情に表れている。あまり機嫌の良さそうな表情ではない。ただ、最初からつながれていた手は離さない。黙々と、そのまま歩く。

坂の頂上まで、もうそれほど遠くもない。もう少しの我慢で目的の景色が見られると思えば、重い足取りも軽くなるように感じた。

陽太の記憶では、兄の亮太がこの坂の頂上まで連れてきてくれた。夕方の日が沈む町を眺めた。

「じいちゃんが言ってた」

その時、不意に亮太は呟いた。じいちゃんとは本当の亮太の祖父ではなく、近所に住んでいた老人のことだ。

この日よりも少し前に亡くなった。隣の家では葬式が行われ、普段よりもどこか賑やかで、同時に静かでもあった。

陽太はあまり老人との交流がなかった。よって、その葬式には出席しなかった。それには幼かったということもあるのだが、対して亮太は老人の家で将棋をして遊んだりしていた。故に、両親と共に葬式に出席していた。

「——この坂を上りきったら、宝物が見つかるんだって」

その亮太の言葉に、陽太は急に喜びを露にして、

「すごい、どこにあるの？」

と、声を高くして訊いた。だが、亮太は苦笑いを浮かべて首を横に振る。

「今は見つからないらしいんだ。いつか、大切な人ここに来たらいいって」

亮太のよくわからない言葉に、陽太は項垂れてため息を吐く。

その日のことを思い出したのは、陽太が久々に家の掃除をしていた時だった。あの日亮太と一緒に探して見つけたガラスの破片——角が削れて薄い石のような形になったもの——が机の引き出しの奥から見つかった。

「陽太」

雲雀の呼ぶ声に陽太は我に帰る。続きの言葉を促すように顔を向ける。雲雀は疲れを見せないように気遣いながら口を開く。

「もう教えてくれないでしょ？」

展望台のある場所までそれほど距離は残っていない。

頂上も見えてきた。せつかくここまでできたのだから、最後まで焦らそう。陽太はそう考える。

「あとちよつとだから」

「だから、どこまであとちよつとなの？」

そうか、と陽太は気付く。雲雀にはまだ展望台に向か

っていることを話していない。それに、ここからではまだ頂上に展望台があるようには見えない。

「頂上の、展望台まで」

「どうしてそこに？」

「秘密」

「もう、意地悪」

雲雀はそれ以上の質問をしなくなる。頂上がすぐそこに見えているからでもあるだろう。静かになり、再び陽太は自分の考えに没入する。

ガラスの破片を見つけた時、陽太は『いつか、大切な人とここに来たらいい』という言葉思い出した。ちよつと陽太には大切な人がいる。

だったら行ってみよう。そう思い至った。宝捜しをした夕景に、もう一度会いに行こう。そう考えた。

「——なあ、兄貴」

陽太は何となく、同じく部屋の片づけをしていた亮太

に声をかけた。

「なんだ？」

「これ、覚えてる？」

そう言っつて、ガラスの破片を示す。それを見て、亮太は少し考えるような仕草の後、ああ、と、納得したように声を漏らした。

「あの時の展望台で見つけたやつだろ、それ」

「うん。……ところでさ、あの時言ってた、大切な人と来たらしいとかいう話さ、どういふこと？」

ふと陽太の口から漏れた疑問は、本人も考えていなかった言葉だった。なんとなく会話をつなごうと口を動かした結果、脈絡のない問いが飛び出した。だが、亮太はなんでもないのでその質問に答える。

「あの展望台でさ、じいちゃんは元奥さんに告白したんだって。それがきっかけで結婚したって言ってた」

「ふうん……ってか、元奥さんって、どういうこと？」

「戦争で死んだんだってさ。で、戦争が終わった後に再婚した。これもじいちゃんが言ってたよ」

亮太は喋りながら、部屋の片付けの作業に戻っていた。陽太もガラスの破片をポケットに仕舞い、片付けを再会する。

「それでさ、あのじいちゃん再婚した奥さんもおんなじところに連れて行ったらいいんだ。元奥さんとは夕陽が綺麗な時間に行っと思いい出があるから、新しい奥さんとは夜に行っただってさ」

「へえ、あんなじいさんにも物語があるんだな」

そんな言葉を返しながら、別のことを考える。自分が雲雀と行くなら、夜にしよう。特に理由を考えたいわけでもなし。それが当然のことのように頭に浮かんだ。

やつと辿り付いた展望台。陽太は雲雀を気遣いながら、街を見渡せる位置まで先導した。人が斜面に出ないよう設置された手すりの前まで歩く。

二人はじつと、眼下に広がる夜景を見据える。標高がそれほどでもないのに、町全体を見渡すというわけにはいかなかったが、それなりに広い範囲を眺められた。この丘の周辺は繁華街になっているので、照明の数はある。綺麗とは言いがたいが、夜景としては充分成り立っている。

「——これが、見たかったの？」

「うん。てか、見せたかった」

「でも、あんまり綺麗じゃないよ」

「まあ、確かに」

陽太本人も、どうしてここに来たかったのかが分からなくなってくる。ただ、二人の視線はずっと半端な夜景に注がれていた。時間が過ぎることを忘れたように、じつと。

ふと、陽太はガラスの欠片のことを思い出す。亮太と探して見つけた、部屋を掃除して再び見つけたガラスの欠片。それを今日は持つてきている。ポケットに手を突っ込むと、そこにガラスの欠片はある。滑らかで、石のような形のガラス。取り出して、月の方へと翳してみる。

亮太とこのガラスの破片を見つけた時、ちょうど夕陽

が沈みきる直前だった。目で直接見るのはまだ少しきつ
いぐらいの時刻。陽太は、その時太陽にガラスの欠片を
翳した。ちょうど今、月に向けてやったのと同じように。
あの日は太陽の光が不思議に色づいて、とても綺麗に見
えた。オレンジの光がガラスの中で輝いているようにも
見えた。だが、月では光が弱すぎる。あの日を思い返せ
るほど綺麗ではなかった。

「どうしたの？」

陽太の行動を疑問に思い、雲雀が訊ねる。

「いや……綺麗に見えるかな、って思ってる」

「何が」

「月。前にさ、沈む前の夕陽をこうしてみたことがある
んだ。その時は綺麗だった」

「ふうん……ちよつと貸して」

そう言って、陽太の手からガラスの欠片を奪う雲雀。

陽太は減るものでもないし、と考えてされるままにして
いる。そして、雲雀が次に何をするかを考えた。

「ほら、向こうにナトリウムランプがあるでしょ？」

雲雀の示す方向には、確かにナトリウムランプ——オ
レンジの光を放つ照明——の街灯が立っていた。距離は
十メートルほど離れている。足元にはベンチがあるので、
おそらくそこを照らすための街灯なのだろう。

「もしかして、あれに翳す？」

当然推測される結論に至った陽太。雲雀は頷き、陽太

に肩を寄せる。そして顔を陽太と並べ、その視線の先に
ガラスの欠片を持つてくる。延長線上には、もちろんナ
トリウムランプの光。

「やつぱり、ちよつと綺麗だ」

耳元での呟きを、陽太はくすぐったく感じる。そして、
ガラスの欠片越しにナトリウムランプの光を見る。

不意に、宝捜しの夕景が蘇った。脳裏に浮かんだ、一
瞬の像。それは、亮太と見た夕焼けの光。ガラス越しに
瞳に焼きついた光。名前すら知らない老人も見えていた
ろう光。

本当に一瞬のことで、陽太がその感覚を味わうよりも
早く過ぎ去ってしまう。もう一度、あの感覚に浸ろうと
考える。しかし、どれだけナトリウムランプを見つめた
ところで、二度とあの景色は蘇らなかった。

「今度は、夕焼けが綺麗な時間に来たいな」

雲雀の言葉に、陽太ははっとする。あるいは、さっき
の景色は雲雀がきっかけだったのかもしれない。むしろ、
どれだけガラスを睨んでも変化がない以上、そう考える
のが妥当だ。

「——じゃあ、今度は夕方に来よう」

陽太は呟く。

「本当の夕陽を、このガラスの欠片越しに見てみよう」

その言葉は雲雀に向かって発した言葉ながら、陽太自
身の願望でもあった。もしかすると、もっと綺麗なもの

が見られるかもしれない。あるいは、さっきの景色や感覚をじっくり味わうことが出来るかもしれない。そう考えると、たまたまなく夕陽を見たくなった。もちろん、それは雲雀と一緒に。きつと、二人だからこそ見られるものがある。——もしかすると、老人はそれが分かっていたのかもしれない。それで二人目の妻もここに連れてきたのか。

——何にせよ。陽太はまたここに来る。二人で宝捜しの夕景を見るために。

「今度も一緒に行こうね」
「うん」

それが会話の終わりだった。二人は半端な夜景に向き直り、じつと視線を向ける。繋いだ手は離れていない。まるでその風景は関係ないように、二人はそこにいる。時間が過ぎることを忘れているかのように。